



産経新聞

経 済 問

学校で

酒を

つくってみる

第2部

地域に根ざして

①

トキの島から



新潟・佐渡島で産経新聞オリジナルの酒造り企画が進んでいる。舞台となるのは、地酒「真野鶴」の蔵元・尾畑酒造が廃校の小学校校舎を酒造場として再生させた「学校蔵」。

（こ）で地域振興の専門家らを迎えたワークショップ「学校蔵の特別授業」が開催された。酒造りに生かせることはないか」と記者も参加した。(新潟支局 市川雄二)

今月4日、島西部の真野湾に面した小高い丘に立つ学校蔵で特別授業は行われた。同酒造5代目蔵元で専務の尾畑留美子さん(50)を中心に、平成26年から年に1度開催。授業料は無料で島内はもちろん、東京や関西など遠隔地から約100人が参加。教室に入りきれず、廊下から耳を傾ける人もいて熱気に包まれた。

「佐渡の酒は世界の宝」

1時間目は「世界とつながる」をテーマに3人の講

「学校蔵」で特別授業

東大社会科学研究所教授

師が登場。日本総合研究所(東京)の主席研究員、藻谷浩介さん(52)は「海外へ行く」と自分が見えてくるように、日本の素晴らしさを伝えることができる。そこに生きる道が見つかる」と具体例を挙げながら説明した。

の玄田有史さん(51)や、ライフネット生命会長の出口治明さん(68)は、情報の重要性を指摘。出口さんは情報化で地方に住むデメリットは小さくなってきている。日本地図を逆さに見ると、佐渡が真ん中にある」と発想の切り替えを提言した。

特別授業には、米国で尾畑酒造の輸入販売を手がける業者で、酒造りを学びに来島中のロブ・シュルツさん(48)も参加。

佐渡高校の生徒9人が「佐渡に大学、観光学部設置を」のプレゼンテーションを行った。生徒は島への観光リピーターが少ない要因を「島民のサービス精神のなさ」と言い切り、大学設置で「島民の態度や価値観にもいい影響を与える」と訴え、拍手が湧いた。



来島中のロブ・シュルツさん(48)も参加。

その後、島内で起業したり、計画中の3人が現状を發表した。質問などを含め4時間余りの濃密な時間。地方にいても世界とつながり、グローバルな考え方ができる。興味・関心の持ち方で地域を見る目、自分の世界も変わる―そんな感想を得た。高校生の地元を思う発表に元気ももった。

「佐渡は文化や歴史、資源が豊かで、手入れの行き届いた自然、住む人には知性がある。酒を飲めばそうした背景がわかるし、島へ来て実感できた」と語った。また、「フランスのボルドーや米カリフォルニアのナパなどのワイン産地と同じように、佐渡の酒は世界の宝だ」と評価。産経新聞オリジナルの酒造りの話をすると、「エキサイティングな試みだ。成功を祈るよ」とエールも。

尾畑酒造も、島という地理上のデメリットを「海に囲まれた島だからこそ魅力に気づいた。島から見れ

定



3人の講師と約100人の「生徒」による熱気にあふれた特別授業。4日、新潟県佐渡市(大山文兄撮影)

